

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

東西知識交流と自国化—汎アジア科学文化論

Interaction and acculturation of knowledge between the East and the West: A pan-Asian approach toward the history of science in Asia

2. 研究代表者氏名

武田時昌

TAKEDA Tokimasa

3. 研究期間

2017年04月 - 2020年03月 (3年度目)

4. 研究目的

自然探究の学問において、異郷からもたらされる典籍、文物や文化的情報は常に刺激的であり、時には大きなブレイクスルーを誘発した。中国において、インド、イスラム、ヨーロッパなどの西方世界からもたらされた科学技術は、理論的変革をもたらすほどに大きな作用を發揮した。また、中国的受容を経た科学や技術は、韓国、日本やベトナムに伝播し、それぞれに異なる自国化の道を辿った。近世日本では、新興の大陸文化を受容しながら、一方ではイエズス会宣教師やオランダから直接に科学知識を導入したことによって、ハイブリッドな独自の近世科学文化を開花させた。本研究プロジェクトでは、『宿曜経』などの仏教天文学の展開や明末清初の西学受容を考察対象に取り上げ、宇宙論、自然観、生命観の形成と変容過程を探ることによって、東西知識交流と自国化の具体的様相を明らかにする。そして、汎アジア的な視座から伝統科学文化の構造的把握を試みる。

In the pursuit of the understanding of nature, texts, artefacts and cultural knowledge from foreign lands often play a stimulating role and in some cases bring about major conceptual breakthroughs. In the case of China, the science and technology introduced from the "Western world", hence, India, Islamic world and Europe, had a profound, revolutionary effect. Through the Chinese intermediary, this body of scientific and technological knowledge was further transmitted to Korea, Japan and Vietnam, where this knowledge underwent different forms of indigenization. In pre-modern Japan, while the influence of new culture from China continued to be felt, scientific knowledge from the Jesuit missionaries and the Dutch

was directly introduced. A unique hybrid form of pre-modern Japanese scientific culture was thus formed. This research project focuses on the Buddhist astronomy as exemplified by texts such as the *Xiuyao jing* 宿曜經, and the reception of "Western knowledge" during the late Ming and early Qing. By examining the formation and transformation of cosmology, theories on nature and life, we hope to illustrate the interaction of knowledge between the East and the West, and the acculturation thereof. Ultimately, an attempt to reveal the underlying structure of traditional Asian science from a pan-Asian perspective will be made.

5. 研究成果の概要

東アジア世界に開花した伝統科学文化を構造的に把握するために、異国からの科学知識や技術の導入によってどのような理論的、社会的作用があり、自国化されていくのかを多角的に考察した。特に注目したのは、中国、韓国からもたらされた日本残存資料であり、その受容過程と日本的展開を検討した結果をもって、中国、韓国へと逆照射することを試みた。主要な成果は、これまで善本として珍重されている宋版や大蔵経版は、近世的な改変がなされており、日本に伝存する古鈔本がそれ以前の旧態を留めていることを明確にした。そして、諸本の校合結果に留意しながら、唐宋における仏教天文学や仏教医学がどのように漢訳されたのかを詳しく検討し、理論的な遡及と近世的展開を探ることで、その伝播と展開の具体的様相を描き出した。以上のような通時代的、多角的な考察を通して、東西知識交流を基軸とする汎アジア的視野における近世科学文化論のフレームワークができたように思われる。また、江戸後期から明治にかけての仏教天文学の理論的考察を試み、梵暦運動の社会的作用を検討することで、伝統科学文化から見た東アジアの近代化の再考という新たな考究課題も提示できたことも、有意義なことであった。今後人文研科学史研究班において、班長は交代することになるが、本プロジェクトの研究成果を基盤として、明清科学文化の総合的研究が立ち上がることを期待したい

6. 共同研究会に関連した公表実績

【国際研究集会】2019年8月24日、25日 從中古到近代：写本与跨文化国際學術研討会（International Symposium on “From Medieval to Pre Modern Times: Manuscripts and Cross Cultural Studies”）（北京大学東方文学研究中心、北京大学人文学部、ブリティッシュコロンビア大学仏教フォーラムとの共催。北京大学外国語学院新楼501会議室）2019年12月14日、15日「緯書と経書学」国際シンポジウム（京都大学人文科学研究所本館大会議室）

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

最終年度の研究成果として、論文と訳注の研究成果報告集を編集し、来年度中に刊行する。取り組んだ中心的な研究課題(仏教天文学、中国及び日本の占術書、東アジア医療文化論)などにおいて、中堅、若手研究者を中心とした読解ワークショップをそれぞれ組織し、研究成果や人的資源の発展的な継続、拡充を図り、人文研科学史研究会の新たな研究体制作りに取り組む。8月24-25日に北京において開催した国際シンポジウム「従中古到近代写本与跨文化交流(From Medieval to Pre Modern Times: Manuscripts and Cross Cultural Studies)」、および12月14-15日「緯書と経書学」国際シンポジウムの研究成果書についても、2020年度に刊行する予定である。

